

海外英語研修プログラム

(オーストラリア・モナッシュ大学・夏・2016)



目次

1. 派遣プログラムの目的、日程、参加者の紹介・・・・・・・・・・・・・3
2. オーストラリアとメルボルンについて・・・・・・・・・・・・・4
3. Monash University と Monash College について・・・・・・・・・・・・・11
4. 英語研修プログラムの概要と授業について・・・・・・・・・・・・・17
5. 英語研修プログラムのクラス外の活動について・・・・・・・・・・・・・20
6. ホームステイについて・・・・・・・・・・・・・23
7. 週末の過ごし方について・・・・・・・・・・・・・23
8. メルボルンの食べ物・・・・・・・・・・・・・26
9. 次回の参加者へのアドバイス・・・・・・・・・・・・・28
10. 所感・・・・・・・・・・・・・29

1. 派遣プログラムの目的、日程、参加者の紹介(執筆担当：

1.1. 目的

理工系学生のための海外英語研修プログラムは、グローバル理工人育成コース英語力・コミュニケーション力強化プログラムおよび実践型海外派遣プログラムの一環として実施された。Monash College での Monash English や理工系英語の授業の受講、そのほかの様々な経験を通し、海外の大学で授業を受けることができるようになり、今後の研究やキャリアの参考になるような経験を積むことが目的である。

参考：

『東京工業大学海外英語研修プログラム(オーストラリア・モナシュ大学・夏)渡航マニュアル』

1.2. 日程

日付	プログラム	
8月17日(水)	出国：成田空港発→香港空港乗継	
8月18日(木)	香港空港乗継→メルボルン空港着 Monash 大学到着、簡単な大学紹介の後、ホームステイ先へ	
8月19日(金)	オリエンテーション、Meet and Greet Activity	
8月22日(月) ～9月16日(金)	Monash College で研修 月火水：Monash English (City Campus) 木金：理工系英語 (Clayton Campus)	
土日は自由行動	9月1日(木)	Engineering Activity day
	9月12日(月)	Visitor session
	9月13日(火)	Field Trip (Bald Hills Wind Farm or SRX)
	9月15日(木)	Oral Presentation
	9月16日(金)	Review of customized program Certificate Presentation
9月17日(土)	帰国：メルボルン空港発→香港空港乗継	
9月18日(日)	香港空港乗継→成田空港着 解散	

1.3. 参加者の紹介

氏名	name	所属	学年
		国際開発工学科	B2
		生命工学科	B3
		機械知能システム学科	B3
		電気電子工学科	B3
		無機材料工学科	B3
		電気電子工学科	B3
		国際開発工学科	B4

	数理・計算科学コース	M1
	地球惑星科学コース	M1
	物理情報システム専攻	M2

2. オーストラリアとメルボルンについて(執筆担当：

2.1. オーストラリア

2.1.1. オーストラリアの概要^[1]

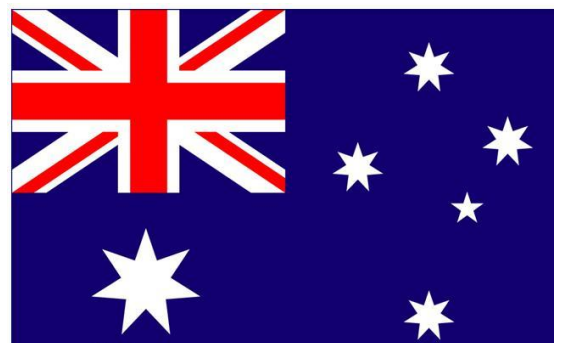
オーストラリア連邦は南半球のオセアニアにあり、世界中唯一の国土が一つの大州をカバーする国である。面積は769万2,024平方キロメートル（日本の約20倍、アラスカを除く米とほぼ同じ）であり、世界第6位である。オーストラリア連邦は6州、1準州と1特別地域からなる。シドニーとメルボルンによる首都争奪戦のすえ、妥協案としてシドニーとメルボルンの中間地点に建設した新都市キャンベラを首都とした。



オーストラリアの位置



地方行政区分



国旗

2.1.2. オーストラリアの国民^[2]

人口：約2391万人（2015年10月）

大半の人々は沿岸から200km以内か、沿岸に住んでいる。シドニーとメルボルンなど最も人口の多い地域は国土の1%に過ぎないにもかかわらず、人口の約84%が集中している。

人口密度：3.11 人/km²

214 国中 211 位(2015 年)である。なお、日本は 31 位で 348.72 人/km²である。

人口構成：ヨーロッパ系の白人 80%、アジア人約 12%、アボリジニなど約 2%である。国民の 28%が海外で生まれた。

言語：英語（公用語）、中国語、イタリア語、先住民の言語など

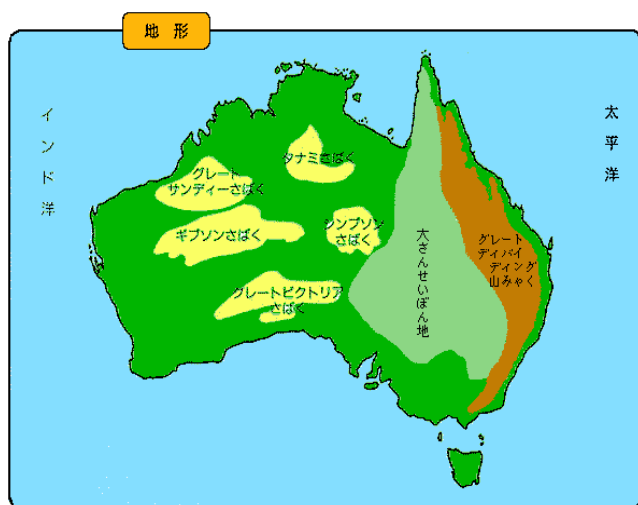
宗教：キリスト教 61%、無宗教 22%（2011 年）

2.1.3. オーストラリアの地理³⁾

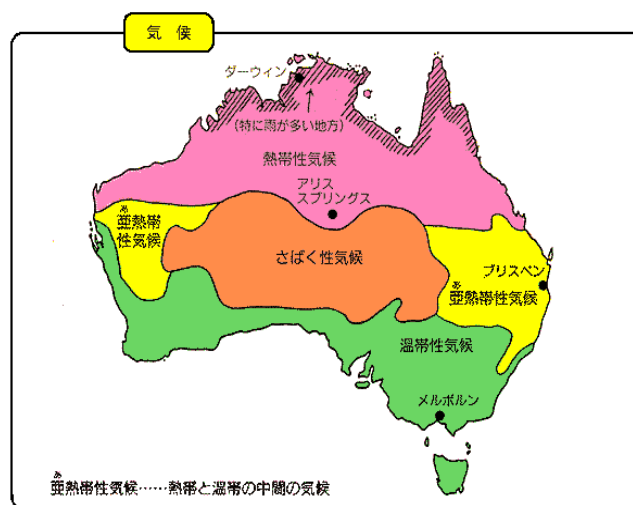
地形

オーストラリア大陸の地形は、西部の台地・中央の低地・東部の高地の三つに分けることができる。

- ・西部の台地：オーストラリアの約 3 分の 2 をしめる広い土地で、ほとんどが砂漠である。
人はあまり住んでいない。
- ・中央の低地：大部分が草地となっていて、羊や牛の放牧がさかんである。
この中央の低地のことを大鑽井盆地とも言う。
- ・東部の高地：東部の海岸ぞいには、山脈が横たわっている。
太平洋から吹く風がこの山脈にあたり、海岸ぞいに雨をふらせる。



地形



気候

気候

北部は、1 年中暑い熱帯性気候となっている。北の海岸沿いは雨がよく降る。

中央部は、気温が高く、ほとんど雨の降らない砂漠性気候である。

南部は、1 年を通じて、適量の雨が降る。夏は暑すぎず、冬は暖かく、おだやかな温帯性気候である。

オーストラリアは日本と反対側の南半球にあるため、季節が逆になっている。だから、今回のプログラムを行うとき（8 月から 9 月）、オーストラリアは冬から春になっていた。

標準時間

東部：GMT+10 時間 中部：GMT+9.5 時間 西部：GMT+8 時間
日本は GMT+9 時間

2.1.4. オーストラリアの経済⁴⁾

主要産業

第一次産業 2.4%、第二次産業 27.0%、第三次産業 70.6%
農林水産業 (2.4%)、鉱業 (9.3%)、製造業 (6.6%)、建設業 (8.2%)、卸売・小売業 (9.0%)、
運輸・通信業 (8.1%)、金融・保険業 (9.3%)、専門職・科学・技術サービス (6.4%) など
(2014-15 年度の GDP 産業別シェア)

名目 GDP：1 兆 4,427 億米ドル (2014 年)

一人当たり名目 GDP：61,066 米ドル (2014 年)

総貿易額及び主要貿易相手国

貿易総額 6,692 億豪ドル (1) 中国 23.9% (2) 日本 10.8% (3) 米国 8.7%
輸出： 3,312 億豪ドル (1) 中国 32.5% (2) 日本 15.4% (3) 韓国 6.8%
輸入： 3,380 億豪ドル (1) 中国 15.4% (2) 米国 12.2% (3) 日本 6.3%

通貨⁵⁾

オーストラリアの通貨はオーストラリアドルといい、6 種類の硬貨と 6 種類の紙幣がある。

為替レートは 1 ドル=77 円 (留学の時点)、ただし、為替手数料も計算すれば 1 ドル=85 円ぐらいになる。

5 セント以外の硬貨すべてが自動販売機に認識される。紙幣は 5,10,20 ドルは普通に使っているが、50 と 100 ドルはカードで支払う場合が多い。



硬貨と紙幣

2.1.5. オーストラリアの教育⁶⁾

義務教育

6 歳から 15 歳 (日本の高等学校 1 年)、あるいはタスマニア州の 16 歳 (高校 2 年) までが義務教育期間となる。また、オーストラリアには、世界で最も地理的に 孤立した地域や遠隔地が存在する。通信教育は遠隔地や孤立した土地に住む子供たちに、コンピュータを利用して学校に通う機会を提供する。

高等教育

オーストラリアには1つの国立大学、36の公立大学と2つの私立大学がある。2008年には、7つの大学が世界ランキングトップ100に入った。

2.1.6. オーストラリアの略史⁷⁾

時間	事件
5万年前	アボリジニは南アジアからオーストラリアへ
1770年	クック船長が大英帝国による領有化を宣言
1788年1月26日	入植開始
1851年	ゴールドラッシュ時代
1901年	連邦政府の成立
1914年から	第一次世界大戦に参加
1927年	首都がキャンベラに
1942年	太平洋戦争に参加
1950年代	急速な経済発展と多くの移民の受け入れ
1980年代	白豪主義を撤廃
現在	世界中に活躍

2.2. メルボルン

2.2.1. メルボルンの概要^{[8][9]}

メルボルンはオーストラリアのビクトリア州の州都であり、ポート・フィリップ湾に面したヤラ川河口の港市。オセアニア有数の世界都市である。1830年代からタスマニア入植者による捕鯨船の寄港地として利用し、歴史が始まった。1850年代のゴールドラッシュを経て、多くの移民を受け入れ、経済も発展し、商業及び工業の都市に発展した。1902年にオーストラリア連邦が誕生してから、オーストラリア首都特別地域のキャンベラができるまでの25年間、メルボルンはオーストラリア連邦の首都であった。メルボルンの街並みには、ビクトリア様式の建物が並んでおり、オーストラリアの最も英国の雰囲気が残る都市と言える。



オーストラリアにおける位置

面積：8806km² (2013年)

東京都のほぼ4倍

人口：434.8万人 (2013年)

東京都の3分の1

人口密度：市域 1566人/km² (2013年)

全体 493人/km² (2013年)

気候：日本と同じ、はっきりとした四季がある温帯性気候だが、「1日の中に四季がある」といわれるほど1日の寒暖の差が激しく、天気もよく変わる。夏は気温が40度近くになることもあるが、湿度が低いので日本の夏よりも過ごしやすいうだ。市街地では冬でも雪は降らないが、朝晩は気温が6度前後まで下がり、不安定な天気が多くなる。



メルボルン

交通手段^[10]



電車



バス

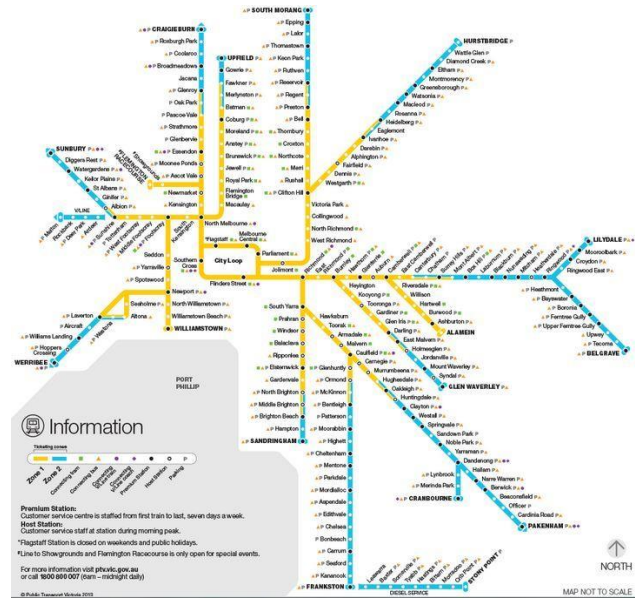


トラム

市域では、バスはあまり一般的な交通手段ではない。しかし郊外に移動するときにはとても便利である。バスは前から乗車し、後ろのドアから降りる。メルボルンに滞在するとき、バスでホームステイから駅までは普通だった。ただし、週末にはバスが 30 分に一本しかなく、遅く始まり、早く終わるので、不便を感じる。

メルボルンには発達した電車ネットワークがある。快速電車なら、終点から CBD まで 30 分くらいしかかからない。その一方で、すべての電車が郊外から市内に（又は反対）走るので、他の線の駅に行くのが不便である。

メルボルンの代表的な象徴と言えるトラムはメルボルンで最も重要な交通手段として、多くの人に利用されている。停車駅（トラム・ストップ）は交差点付近の中央分離帯にあることが多い。速くはないが、メルボルンの景色を目に収めることができる。



電車のネットワークマップ

2.2.2. CBD(Central Business District)

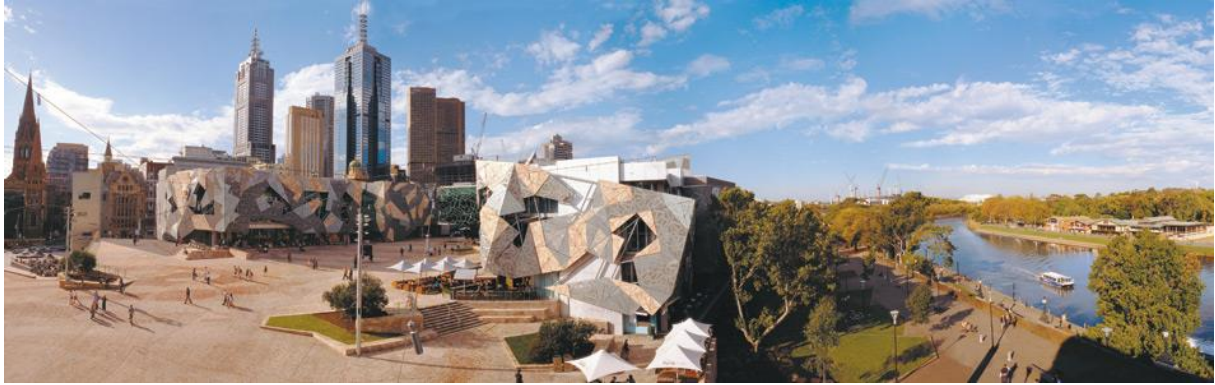
CBD の直訳は中心商業地域で、メルボルンで経済活動が活発な地域である。人口が集中し、高層ビルが森のように立っている地域である。商業以外には娯楽も盛んである。

モナシュカレッジのシティキャンパスが CBD にあるので、放課後街に回ったりすることが多かった。CBD 内には無料のトラムが回っているから、すごく便利だ。

ちなみに、大きな中華街はシティキャンパスのすぐ隣にあるから、私はよく中華街にご飯を食べに行った。その dim sum（餃子や小籠包など）をはじめ、中華料理は日本のより何倍も美味しかった。



CBD



Federation Square と Yarra River

2.2.3. メルボルンの観光地

メルボルンは文化の気分があふれている。聖パトリック大聖堂やビクトリア時代の古い建物もあるし、ビクトリア州立図書館や博物館、美術館など教育施設も整備されている。また、植物園、動物園、水族館などもあり、面白かった。オーストラリア人はスポーツが好きで、いろんなスポーツ試合が見られる。郊外では、グレートオーシャンロードやフィリップアイランドなどの自然観光地がある。

参考文献

- [1] Wikipedia, “オーストラリア”, <https://ja.wikipedia.org/wiki/オーストラリア>
- [2] 外務省, “オーストラリア連邦”, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/index.html>
- [3] THE JAPANESE SCHOOL OF MELBOURNE, オーストラリアの自然と生活, <http://svc101.wic030v.server-web.com/sekai/school-syokai/sankoshiryo/12syakai/7/02/index.htm>
- [4] 同 [2]
- [5] NTA 日本旅行オーストラリア, トラベルインフォメーション, http://www.nta.com.au/travel_info.html
- [6] 同 [1]
- [7] 在日オーストラリア大使館, オーストラリアについて, <http://australianmanabo.com/pdf/TellMeAboutAust-compressed.pdf>
- [8] オーストラリア—検索エンジン・リンク集, メルボルンの概要, <http://www.australia.arakawanet.com/html/sitemap/vic/melbourne.html>
- [9] Wikipedia, “メルボルン”, <https://ja.wikipedia.org/wiki/メルボルン>
- [10] Ryugaky Point, メルボルンの交通について, <http://ryugakupoint.uhakpeople.com/info/aus/about-the-traffic-of-melbourne.php>

3. Monash University について(執筆担当 :

モナシュ大学はオーストラリアでとても有名な大学である。学生数は学部と大学院を合わせて約 55000 人。オーストラリアでもっとも研究力が強い八つの大学“Group of Eight”に所属している。



モナシュ大学には、たくさんのキャンパスがある。僕たちと関係があるのは、Clayton campus と City campus である。City campus は留学生向けの英語授業が行われる塾みたいな場所で、メルボルンの city の中心部に存在している。

Clayton campus の方は本当の大学キャンパスの施設が全部揃っている。



キャンパスの中心にキャンパスセンターという建物がある。中には食堂、レストラン、コンビニ、映画館（そうだ、本物の映画館だよ！）、美容院、銀行など、各種のサービスが提供されている。



キャンパスセンターの裏にある広場。食堂やレストランで買った食べ物をここで食べることができる。雨のことを配慮していないのはちょっと残念。広場の向こう側に大きなモニターがあって、試合などを放送している。食事をしながら試合を見ることができるのが嬉しい。





モナシュ大学の体育施設は驚くほどに充実している。2階建てのトレーニングセンターには最新の器械がたくさん入っている。それ以外にプールと各種スポーツのコートが揃っている。





図書館、学習スペースが充実している。(ソファもある)



モナシクラブ、高級感が溢れる建物、具体的な役割が不明。



駐車場。メルボルンでは電車やバスなどが日本のように便利ではない代わりに、みんな車を持っている。キャンパス内に広い駐車スペースがあるので、たくさんの学生が運転して通学する。

全体的にいうと、モナシュ大学は東工大とは全く違うタイプの大学である。そこで今までなかった大学生活が体験できると思う。

4. 英語研修プログラムの概要と授業について

留学中の授業は月～水に City Campus で行う Monash English と木金に Clayton Campus で行う English for Engineering and Science に分かれていた。

4.1. Monash English(執筆担当 :

Monash English とは、city キャンパスで週に3日(月曜、火曜、水曜)に行なわれるスピーキング、リスニング、ライティング、そしてリーディングなどの基本的な英語力を身につけるための授業である。よく ME という略称で呼ばれていて、現地につく前に行なわれるプレースメントテストの結果によって1～7のクラスに分かれて授業を行なう。また授業は午前組と午後組に分かれて行い、大体1クラス15人～20人ほどであった。現地に着いてから分かったことだが、レベルが上のクラスほど午後の授業に組み込まれる傾向があった。自分が受けていたクラスでは、クラスの半分が日本人、もう半分は中国人であり、日本から来た留学生は全国の様々な大学から集まっていた。授業の内容については、クラスごとの先生により授業形態が異なっていたので、今回は自分が受けた授業について書いていく。主に授業は一人で考えていくというより、周りやみんなと一緒に考えたり話し合ったりして進めていき、時にはゲーム感覚で競い合ったりして進めていった。英語で行なわれる授業と聞いてとても緊張したが、先生はとても明るく、ミスをしもしっかりフォローをいれてくれてとても発言しやすい雰囲気になっていた。先生が、これから自分たちが何をすべきか、または難しい単語についても何回も違った表現で説明してくれたおかげで、一回聞いただけでは分からなくとも自分に分かりやすい表現を待って聞き取ることができたため、スムーズに授業が進められることが多かった。宿題なども出されたがとてもやり切れない量ができることはなく、気楽に英語を学ぶことができ良かったと思う。クラスメイトについては、知り合い同士ではないことが多いので、早く仲良くなりたいと思う気持ちはみんな同じだと思う。自分から積極的に話しかけてみて、このプログラムに参加した皆様が、一日でも早く充実した city キャンパスライフを送れることを願う。



Cityのクラスメイトとの集合写真



授業後に食事に行った時の写真

4.2. English for Engineering and Science(執筆担当 :

・ Class

Clayton キャンパスでの授業は、主に理工系の表現を学ぶものであり、クラス編成も、阪大と東工大の理工系学生で構成されていた。また、クラスのレベルは A、B、C の 3 クラスがあり、事前学習で行われるクラス分けテストによって適切なクラスに分けられる。授業内容を詳細に述べると、始めに、モノの形状やプロセスの表現などの理工系で必要とされる英語表現を学び、その後 3、4 人のグループに分けられ、グループごとに与えられるテーマについて授業の終わりに 5～7 分程度のプレゼンを行うというものであった。与えられるテーマは授業の始めに学んだ表現と関連しており、プレゼンの中でその日学んだ表現を実際に用いることができ、すぐに身に付けられる。授業評価は、自分の専門に関するプレゼンテーションを行うというものであり、最終日に行った。僕は、今回のプログラムに参加する以前にほとんどプレゼンを行ったことが無かったため、プレゼンに対する苦手意識があったが、ほぼ毎回の授業でプレゼンを行い、Native Speaker の先生からのアドバイスを受けることによって、すぐに苦手意識を克服することができた。そして、最後の専門分野に関するプレゼンをやり遂げることで、大きな自信へと繋げることもできた。このように、Clayton での授業は、理工系表現を学べ、実践的なプレゼン練習もしっかりできるという点で、とても有意義なものであった。それに加え、他の学生の専門の内容も知ることができてとても新鮮であり、また、阪大の友人もたくさん作ることができて、とても充実したものであった。

・ Certificate Presentation

日本への帰国前日に終了証授与式が行われた。各クラスの先生方の振り返りの話を聞くうちに、阪大のクラスメイトや先生との別れが非常にさみしくなった。また、そこではオーストラリアで撮ったみんなの思い出の写真のスライドショーも行われた。写真の中に自分が実際に見た景色が現れるたび、その当時の記憶が鮮明によみがえり、オーストラリアがとても名残惜しく感じられた。しかし、最後に先生から終了証を受け取った時には、留学生生活をやり遂げたという大きな達成感と、ともに充実した楽しい日々を過ごした仲間たちへの感謝の気持ちで一杯になった。

5. 英語研修プログラムのクラス外の活動について

クラス外で Field Trip として SRX と Wind Farm の見学をした。

5.1. SRX(執筆担当) :

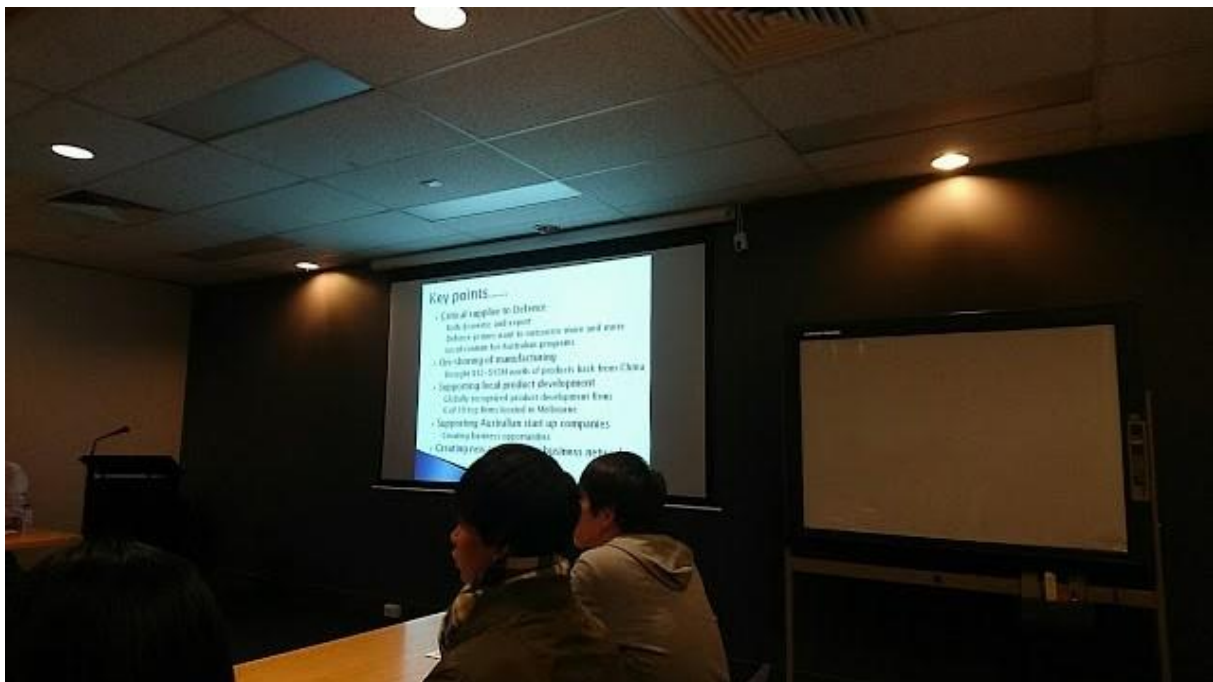
電子機器の受託生産サービスを行っている SRX という会社の工場を 1 時間程度見学した。

5.1.1 Discussion

まず SRX を訪れる前にモナシュ大学の教室に集合し、一時間半の事前学習を行った。3 人から 5 人程度のグループで最初の一時間は SRX についてインターネットで調べ、一人当たり二つの質問を考えた。その後 30 分間グループ内で質問をシェアし、どのようなことを質問するかについて英語でディスカッションを行った。その後昼休憩を挟んでバスに乗り SRX へ向かった。SRX まではモナシュ大学のクレイトンキャンパスから約 20 分で到着したので、メルボルンの都市から遠く離れてはいなかった。

5.1.2 SRX に関するプレゼン

SRX の施設内に着くと、男性と女性のスタッフが 1 人ずつ迎えてくれた。男性のスタッフは首からデジタルカメラを提げていた私を見て、施設内は完全に撮影禁止であることを注意した。SRX は防衛(軍事)に用いられる電子機器の製造を多く請け負っており、機密情報が多いのでカメラ撮影は禁止であると説明された。ただし、パワーポイントの資料を撮影することは許された。



その後男性の方から SRX についてのパワーポイントを用いた説明が始まった。初めに自分の英語の速さが聞き取れるかの確認はあったが、非常に速く聴き取ることが困難であった。説明の内容は SRX の業績やパートナー企業の紹介、具体的な製品の紹介であった。SRX は主に防衛(軍事)と医療用途の電子機器を生産しているが、製品自体のデザインは行わず、最適な製造工程をデザインしていることがわかった。

5.1.3 工場内見学

プレゼンの後、男性の方に説明して頂きながら施設内を見学した。初めに社員食堂を横切ったが、モナシュカレッジのシティキャンパスのキッチンと全く同じコーヒーやミロの瓶があり、見た目は似通っていた。そして、具体的な製品の説明を受け、機械によって基盤の上に電子部品が高速で接合されていく様子、電子部品のテストを高速で自動で行う様子、機械のメンテナンスを管理する機械、基盤の上に正しく電子部品が接合されているか厳しい目でチェックする職員の方々の様子等を見学した。これとって物珍しいものは無く、英語の説明も速く聴き取りにくかったので退屈に感じた学生が非常に多かった。個人的には、医療用途の製品を生産している割には、散らかっていて、特別な服装を身にまとうこと無く施設内を見学できたことに疑問を感じた。これについて、最後の質問の時間に質問したが、空気を循環させているので完全では無いが多少は綺麗な環境を整えているとのことだった。施設内の見学は 30 分程度で終了した。

5.1.4 質問

施設内の見学を終えた後、質問の時間が設けられた。事前学習で 1 人あたり 2 つ質問を考えていたはずがほとんど質問する学生は居なかった。参加した学生は 20 名程度で質問した学生は 5,6 人という感じであった。これは、やはり男性の説明が聞き取れなかった人が多かったことが影響しているように思えた。質問の中では環境にどのように配慮しているか、様々な製品の製造において最も複雑なプロセスは何か、SRX が請け負っているサービスはどのようなものかについて主に説明された。質問が終わった後、再びバスに乗ってクレイトンキャンパスに戻った。

5.2. Wind Farm(執筆担当：)

オーストラリアに数多くある風力発電所のうち、メルボルン市内からバスで 2,3 時間ほどの場所にある Bald Hills Wind Farm に見学に行った。



5.2.1. Bald Hills Wind Farm について

オーストラリアは、2020 年までに電力供給の 20%を再生可能エネルギーにしようという目標を掲げている。Bald Hills Wind Farm はその達成のために 2015 年に建造された風力発電施設である。52 基のタービンを保有し、発電容量は 106.6MW、年間発電量は約 380GWh である。

5.2.2 見学の様子

Wind Farm に着くと所長さんが迎えてくれて概要の解説のあとに質問タイムが設けられた。たくさん質問をさせていただいた後、タービンの整備をしている人の話を聞いた。その後に屋外でタービンの見学をした。

質疑応答で教えていただいた内容は次のようなものであった。

- 各タービンの配置は全てのタービンが最大効率で風を受けられるように考えられている。数年分の風のデータを集めてそれを元にシミュレーションをして決められた。
- 羽根の形はその土地の風の強さによって決められる。
- タービンのメンテナンスは 6 か月に 1 回行われる。
- タービンの制御は全てコンピュータによって行われている。それに付随し、「発展途上国などにこの設備を提供できるか」という質問があった。答えとしては制御面ではプログラムを提供するのみなので問題ないそうだ。しかし、メンテナンスで要する技術力がないため難しいとのことだった。

事前に、Wind Farm を建設するにあたって反対の声が多かったこと、そしてその理由が 景観を崩すこと と 騒音がすること であるという話を聞いていた。しかし、実際にタービンの真下に立ってみても、騒音というほどの音は出ていないように感じた。職員さんの話では、元々は何もない丘だったため何の音もしない土地であったが、Wind Farm によって音がするようになったため反対されたいらしい。

5.2.3 総括

見学に行った日はあいにくの悪天候で非常に寒かった。広大な土地に風力発電が立ち並んでいるので、晴れている日の光景は美しいものであっただろう。しかし、これだけ大規模な風力発電設備を観覧することができ、職員さんの話を聞くこともできて貴重な経験を得られた。

参考 : Monash College 資料

6. ホームステイについて(執筆担当：

私のホストファミリーは、父、母、息子1人だった。その息子はモナッシュ大学に通う2年生(キャンパスは違う、私は City と Clayton だったのに対し彼は Peninsula。)だった。彼はゲーム好きでポケモンもやる人だったので、2人でポケモン対戦したりもした。父と母はほぼ毎日教会へ行って夜遅く帰ってきたことが多かった。そのため家族みんなで食事することはあまりなかった。私の分の夜御飯は息子が作ってテーブルの上に置いておいてくれた。週2回の頻度で洗濯もしてくれた(ホームステイ先によってはわざわざ近くのコインランドリーまで行って自分で洗濯するよう言われた所もあるらしい)。週10ドルでWi-Fiも使わせてくれた(オーストラリアは日本と異なり電気が不足気味なので、Wi-Fiが有料だったり使い勝手の悪いことが多い)。3人とも英語を喋るスピードがゆっくりだったので比較的聞き取りやすかった。

7. 週末の過ごし方について(執筆担当：

メルボルンの人々は基本的に夕方には活動を終わってしまう。よって授業が終わりワークショップに参加した後ではあまり観光に時間を割くことができない。そこで週末は観光のための時間としてとても貴重な役割を果たしていた。大きく分けるとシティ近辺の観光、メルボルン郊外の観光(ツアー)、メルボルン以外の観光があげられる。

7.1. シティ近辺の観光

近辺といっても場所によっては移動に30分~1時間かかったりもするので平日ではまわりきれないところも存在していた。

フェデレーションスクエア

主要駅であるフリンダースストリート駅のすぐ目の前にある人々が集う場所。博物館、美術館、レストラン、カフェが多数集まった場所で週末には常に何かしらのイベントが行われていた。基本的に入るだけなら入場料がかからず free-wifi があるため待ち合わせ等でも重宝した場所であった。



展望台からの景色

ユーレカスカイデッキはフリンダースストリート駅から歩いてすぐにある高層ビルである。ビルには南半球で最も高い展望台がある。そこからはメルボルンが一望でき、特に夜景は一見の価値があった。



7.2. メルボルン郊外の観光（ツアー他）

シティを飛び出しメルボルン郊外に観光に行く場合、基本的に交通手段として車を持たない我々は週末を使い一日がかりで行くしかない。またその際、ツアーが有効に使える。日本から出国時に案内されたものもあるが、実際には現地で自分でツアーを探して申し込む方が遥かに安い。



ペニンシュラホットスプリングス
(モーニントン半島)

メルボルン郊外にある有名な温泉施設。車ならシティから二時間程だが公共交通機関で行くとシティから電車とバスで3時間強+徒歩1時間の遥かなる道のり。それだけに辿り着いた達成感はひとしおであった。

露天風呂が十数個あり、海外では温泉は水着を着て入る混浴だということが実感できる。

尚、カップルだらけなので一人で行く際には注意が必要である（精神的に）。



グレートオーシャンロード

シティから車で三時間程いったところにあるメルボルン随一の観光スポット。どの観光本を見てもだいたいここに行けと書いてある。その分ツアーが充実しており、野生のコアラの生息地が近くにあるため運が良いと途中で野生動物と触れ合えたりもする。尚、誰が撮ってもカッコいい写真をとれると思う程雄大な大自然がそこにはある。



7.3. メルボルン以外の観光

せっかくオーストラリアにきたのだからということでメルボルンを飛び出し他の都市に飛び出すのも良い案である。当然日本から再度来るよりも遥かに交通費が抑えられるというメリットも存在している。

シドニー

言わずと知れた人気観光地。画像は有名なオペラハウスのもの。半日もあればシドニーまで行くことができるので金曜日の授業後から移動し日曜日の夜に帰ってくるという人をちらほら見かけた。



こちらも同じくシドニーのマンリービーチ。このように気軽に移動できるが、しかしメルボルンの金曜日は道がとても混むので空港に向かうのがとても大変である。尚、空港からシティまで通常 20 分程で移動できるバスが存在している。

8. メルボルンの食べ物(執筆担当 :

メルボルンはコーヒー文化が有名で、留学中はコーヒーを飲むことが多かった。そのため、コーヒーについて書こうと思ったが、昨年度の報告書にあるためコーヒーについては昨年度(H27年度)の報告書を参考にすると良い。私はファミリーの食事に満足できず、CBD 内で外食することが多かったため、来年度本プログラムに参加する学生向けにオススメの飲食店について述べる。

① Prime House Melbourne

住所:5A/500 Bourke Street, Melbourne

価格:20-40 AUD

HP: <http://www.primehousemelbourne.com.au/menu/>

ここではステーキを食べることが出来る。私は 280 g のビーフステーキを食べ、とても美味しかった。シティキャンパスからそんなに遠くないので、一度行ってみることをお勧めする。



② Burger Project

住所:Level 2, Shop FI 2.05, 260 Collins Street, Melbourne

価格:10-20 AUD

HP: <http://burgerproject.com>

このハンバーガーもかなり美味しい。サイズが他の店と比べて小さいので間食として食べることも出来る。



③ Grill'd

住所:369 Little Bourke Street, Melbourne

価格:10-20 AUD

HP: <https://www.grilld.com.au>

旅行ガイドに掲載されているお店。ここでハンバーガーにはまってしまい、オーストラリア滞在中の外出ではハンバーガーばかり食べた。上記店舗の店員さんはフレンドリーで、注文の際に名前を聞かれ、料理を持ってくるときに名前を呼んでくれた。ただし、このチップスは量がとても多いので、レギュラーサイズを注文するときは気をつけた方がよい(下記写真はレギュラーサイズ)。



④ その他

Hungry Jack's:オーストラリアで人気のハンバーガーチェーン店。街のいたる所にあるので、昼食に迷ったらここ。

9. 次回の参加者へのアドバイス

- ポケット Wi-Fi を借りるときは現地の会社(OPTUS や Vodafone、Telstra)で借りるのが安い。最も安いもので 3000 円程度らしい。nittel communications というところでは日本語で契約することができるが現地の会社よりは高め。日本で借りるよりは安い。
- city にはダイソーがあり、日本の小物もある。日本のダイソーで買ったお土産を渡した際に、city にあると笑われてしまった。日本のお菓子も置いてある。
- city には日本の食材を扱っている店があり、そこで調味料などを買えば日本料理を作ることができる。しかしなぜかコンソメだけ見つからなかった。ここにも日本のお菓子がある。
- ドルを両替するよりできる限りカード払いにしたほうが外貨両替の手数料を抑えられる。しかし、別会計ができない店も少なくないので複数人でご飯に行くと現金が必要になることもある。
- 日本で無理して冬物を買うよりは現地のセール品を買ったほうがお得。アウトレットもある。
- お土産に小物を買う場合、お土産ショップに行くより、Queens Victoria Market で買うほうが安い。

10. 所感

国際開発工学科 2年

まず、一か月間の楽しい留学期間を提供してくれた東工大と CIEE に謝する。オーストラリアのメルボルンで有意義な一か月を過ごした。日本に行って、東工大に入って、英語の勉強があまり進まなかった。やはり、英語を主言語とする国に行かないと英語の重要性と英語力の不足に気づかない。日本に帰ってきてでも英語を続けて勉強しようと思う。

そもそも私は留学生なので、日本に行った時多少カルチャーショックを受けた。だから、メルボルンに行く前によく調べて、心構えをした。それでも、現地でのルチャーショックを避けられなかった。がっかりしたのではなく、びっくりした。バスから降りるとき運転手さんにサンキューを、コンビニで店員さんと挨拶をなどにびっくりした。やはり、現地に行かないとそういうことは感じられなかった。

英語研修先のモナシュカレッジは施設が整備されて、先生たちは専門的で、熱心だ。シティキャンパスではレベル 5 のクラスに配属された。そこでリーディングとライティングを練習した。私以外クラスには 10 人の日本人、5 人の中国人ともう 1 人のアラビア人がいた。普通にはクラスの中国人と日本人はあまり話さなかったが、私は両方と仲良くなって、最後には皆が友達になった。また、クラスの先生はアメリカ人であることに驚いた。優しかった。一方で、私がいたクレイトンキャンパスのクラス B の先生はフィリピン人だったが、言語学の博士で、すごく専門的だった。クラスメートもすべて日本人だった。そこでは英語で発表する機会が何回もあったから、スピーキング能力を磨いた。中には field trip と engineering activity day があり、面白く、視野を広げた。

私の授業はすべて午前だった。午後のクラスの人より自由時間が多いと言っても、効率よく利用しなかった。普通にはシティでご飯を食べて帰るとするのが定番で、他にはコーヒーを飲みながら CBD を回るくらいで、ビクトリア州立図書館にも入らなかった。そうはいても、意外なことに、現地で買った本を一冊半くらい読んだ。週末は友達と一緒に観光地や博物館などに行った。今考えたら、平日ももっと現地の生活を enjoy すればよかった。

友達と言えば、何十人も友達ができた。8 割は日本人で、中国人や韓国人とアラビア人の友達もいる。残念なことに、native speaker の友達は一人もできていない（よく native speaker の人と話したけれど）。他の東工大生はモナシュ大学の日本語クラブに参加して native speaker の友達ができたそうで、羨ましい。

今回のプログラムの特徴といえば、もちろんホームステイである。うちのホストファミリーはスリランカから来た家族だった。ファミリーの両親が 60 代で、よい教育を受けた。ホストファミリーと私の家族の経験が似ている。何世代もの努力で、田舎から一歩一歩外に出て海外までに行った。だから、私はホストファミリーと仲良くなっていた。ホストファミリーが忙しくて、あまり一緒にどこかへ行ったりはしなかったが、毎日ご飯をするとき 2 時間ぐらいの会話をしていた。各国の文化から、仕事のやり方や人としてのルールまで、話した。助かった。

もう一つ重要なことは、言うまでもなく、食べることである。メルボルンの料理は種類が多く、すごく美味しかった。特にお肉とコーヒーがうまかった！また、中華料理も日本のより何倍も美味しかった。食べるとき感動した。ホストファミリーの料理も私の飲食習慣にすごく合っていたから、一か月間、私は太った。

不満な点もあるが、たいしたことではない。一つは物価が高い。これはしょうがなく、2週間経って、慣れた。もう一つは今回のプログラムに日本人が多すぎた。日本人を差別するわけではないが、私は英語の悪い発音より、恥ずかしくて英語を話さないことが嫌いだ。皆初めは英語を話していた。残念だが後半にはよく日本語をしゃべるようになった。

最後に、もう一回今回の留学機会をくれた方々に感謝する。今回の留学はすごく有意義だった。私はこれからも英語の勉強をし続け、来年の春休みに他のプログラムに参加したい！

生命理工学部3年

本プログラムを通して、オーストラリアの文化、生活、食や雰囲気学ぶことができた。Clayton キャンパスで行われた、大阪大学工学部の学生と一緒に理系英語を学ぶ授業に関しては十分満足のいく内容であった。しかし、City キャンパスにて行われた Monash English の授業は満足のいく内容ではなかった。

私の参加した Monash English(ME)のクラスは日本人1人とマレーシア人1人とあと中国人10数人という構成であったため、授業中に中国語ばかりが聞こえてきた。授業に対する発言で中国語を使用すると先生は注意をするが、グループディスカッション等で話し合う際に、中国人同士が中国語で会話することが多くみられ、ME の授業が嫌でしかなかった。しかし、ME の授業は日本の英語の授業では習わないことが多く含まれ、得られたことも多かった。ホームステイに関して、私のホームステイ先には私の他に中国人留学生が2人いて1人は私が来たあとに来た。初めはファミリーと私ともう1人の留学生と夕食を食べていたが、もう1人が到着してからは、留学生は留学生だけで夕食であった。食事に関しては私の好みの味ではなかった。お風呂はシャワーが使用出来る時間が留学生は4分で、冬ということもあり、かなり寒かった。家によっては時間制限のない家もあったようだ。ファミリーが就寝する際はwifiがオフになり、23時頃から8時頃まで使用できなくて不便であった。またスマートフォンをレンタルして持って行ったが非常に使いにくかった。今後本プログラムに参加する学生はインターネットと携帯電話に関して良く考えることをお勧めする。ここまでネガティブな側面ばかり述べてきたが、本留学は満足のいくものであった。CBDには美味しいお店が多く、放課後にハンバーガーやSUSHIなどを食べた。東工大と違ってClayton キャンパス内には多くの飲食店があり、美味しいものがいっぱいあった。休日は他の参加者と博物館、動物園や水族館に行ったり、オプションツアーでグレートオーシャンロードとフィリップ島へ行ったりして楽しかった。Clayton キャンパスでの授業は主に英語でのプレゼンテーションの授業で今後、研究の発表等に役立つと思われる内容で非常にためになった。Clayton での授業は大阪大学の学生と一緒にの授業であったため、授業中は賑やかで、東工大とは違った雰囲気を感じとても楽しかった。

本留学を通して自分の英語力の低さ、勉強量不足を痛感した。とくにアウトプット能力の低さを痛感した。本留学で初めて外国に行ったが他国での生活を経験したことで日本の良さを再認識できた。今後は研究、就職活動に向けて英語学習を続けたいと思う。

機械知能システム学科 3年

僕が留学をしようと思ったのは、英語力の向上はもちろんだが自分の周りの人々とは違う考え方を知りたいと思ったからだ。このプログラムではホームステイができるため、海外の人のいろいろな面に触れることができると思い参加を決めた。

期間中はホストファミリーとの会話やモナシュ大学剣道部への参加を通して、多くの異文化を知ることができた。家の中ではファミリーと留学生と一緒に、文化の話や宗教の話からスリランカの大量のカフェインが含有されているお茶の話までいろいろな話をした。日本から持参した剣道着だけ持ってモナシュ大学剣道部にも参加してきた。快く受け入れてくれ、防具と竹刀も貸してくれたので、外人と剣道をするという貴重な経験ができた。練習後には部員の方々と夕飯を食べに行き、剣道の話で盛り上がった。オーストラリアの剣道では少し日本語が使われている。たとえば「Mr.〇〇」ではなく「〇〇先生」を用いる。最初に剣道をオーストラリアに広めた人がどこに日本語を使ったかに依存しているらしく、興味深いと思った。

また英語に対する意識も変化した。モナシュ大学で日本語を勉強している学生と話をすることがあったのだが、彼らの日本語の上手さに驚かされた。多少ぎこちないところがあるものの普通に会話するのにほとんど支障がなかった。しかも彼らは日本語を専攻しているわけではなく、工学を専攻している学生だった。僕にはあれほど英語を使いこなすことはできない。トライリンガルの学生もいて自分がとても情けなく感じた。留学前は英語の重要性は知っていたものの、英語ばかり勉強して自分の専攻の勉強が疎かになっては元も子もないだろうと思っていた自分がとても小さく見えた。これからは専攻の勉強はもちろん、英語の勉強も日常的に続けていこうと決意した。

大学での英語の授業は非常に満足のいく内容であった。先生の英語は聞き取りやすく、理解しやすいものであった。どんな単語も簡単な表現で解説してくれるので授業のほとんどを理解することができた。自分のクラスは日本人と中国人が混ざっていたので中国の学生と英語で会話する機会が豊富に与えられた。中国人は日本人より **speaking** が優れていた。文法知識などは日本人のほうが優れているようであったが、会話で用いる表現のストックの多さや、英語を話すことの慣れは劣っていた。言いたいことを英語で組み立てているうちに中国人に先を越されてしまうことが何度もあり、悔しい思いをした。授業後には参加自由の **workshop** があり、**discuss the news** に何度か参加した。先生が選んできたニュースを様々な方法で伝える方法を学ぶ授業でとてもためになった。ニュースだとどうしても知らない単語が大量に出てきてしまうのでそれをいかにわかりやすい表現に置き換えて解説するかが重要となった。

休日にはメルボルンを観光し、充実した時間を過ごすことができた。中でもフィリップ島やグレートオーシャンのツアーでは、オーストラリアの動物と触れ合ったり、雄大な自然を目の当たりにしたりとオーストラリアを満喫できた。

このプログラムを通して、オーストラリアという移民の国に滞在することでいろいろな考え方の人々と交流することができ、自分の世界を広げることができた。滞在中に出会った勉強熱心な人々のように専攻の勉強はもちろんのこと、英語学習にも力を入れて次に海外に行ったときはもっと自由に会話ができるようにしたい。

電気電子工学科 3 年

中国と日本以外の国に行くのは、今回が初めてだった。このメルボルンでの一ヶ月間は、日本に来た最初の一ヶ月間に比べると、かなり異なっていた。日本人と中国人は、人種が違うけど、同じアジア系なので、見た目の差異が明らかではない。今度は本物の外国人をたくさん見て、とても興奮した。オーストラリアの人はとても明るい。コンビニで買い物をする時、店員は自然に世間話をしてくる。僕は一度 kabob を食べながらコンビニに入った。そこの店員は私に「これはどこで買った？おいしい？」と聞いて、僕はびっくりした。また、ある日、僕は傘を持つのを忘れた。その日はあいにく大雨が降って、とてもやばい状況だった。僕はバスから降りて、どうやって教室に行けばいいと、悩んでいるうちに、一人のオーストラリア人が来て、「傘持ってない？どこに行くの？送るよ」と言った。「なんて親切な人だろう」と、僕は感動した。

学校も素晴らしかった。City Campus の場合は、メルボルン City の中心にあるので、周りのサービスはとても充実している。州立図書館も近いし、ショッピングセンターもたくさんある。さらにメルボルン中心地域の路面電車は無料で、とても便利だった。Clayton Campus の場合は City から遠いけれど、キャンパス自体はすごく広いので、毎日歩いているだけで新発見ができる。その上、スポーツ施設は完璧と言っても過言ではない。

僕が今度のプログラムで一番満足したのはホストファミリーだった。僕のホストマザーはカンボジア系の人で、大変いい人だった。料理が想像できないほどうまい。僕の食事量はホストファミリーのお兄さんのほぼ2倍なのに、ホストマザーは怒るどころか、とても喜んでくれた。僕が一人で日本に留学しているのを聞いて、ずっと褒めてくれていた。こんなにいいファミリーと出会って、自分は幸運だと思う。

最後はちょっと今回のプログラムで気づいたことを紹介したいと思う。一つ目は「英語を話す時は自信が大事」。最初の日には僕はあまり英語を上手に話せなかった。自分は英語の能力がかなり高いと思うが、今までまともに英語を話す機会がなかったため、最初は緊張した。しかし、初日の夜にホストファミリーのお兄さんとアメリカのドラマで盛り上がりながら、自分は英語を話す能力が別人みたいになった。これは自分がこうやって英語を喋ることができる意識のおかげである。もう一つの感じたことは「英語が上手な人と会話すると、自分も上手だという錯覚が生じる」。僕のホストファミリーでは、お兄さんはオーストラリアで生まれたので、英語がすごく上手である。しかし、ホストマザーは日常の仕事で英語をほぼ使わないので、英語はそんなに上手でもない。僕は毎回お兄さんと話をした後、自分の英語は強いと感じたが、ホストマザーと話すとは伝わらないことはよくあった。そこで僕が気づいたのは、お兄さんとうまく話せるのは、僕のおかげではなくて、お兄さんの英語力が僕の間違いもカバーしてくれたのだ。英語は我々にとって、異文化と交流する道具である。毎回英語が母国語の人と交流するとは限らないので、これからはさらに英語力をアップして、相手の英語能力に関係なく交流できるようにがんばりたいと思う。

無機材料工学科 3年

私は英語コミュニケーション能力の向上とともに、一人で海外生活を送る経験をしたと思い、このプログラムに参加した。グローバル化が進む中、将来、自分が海外で仕事をする可能性も十分にあり得ると考えたからだ。しかし、海外に渡航した経験もなく、ましてやホームステイも初めてだったため渡航前は不安でいっぱいだった。ところが、実際にオーストラリアに到着すると、1 か月はあっという間に過ぎ、もっと長く滞在したいと思うようになっていた。オーストラリアでの経験は自分にとって全て新鮮であり、大きく成長することができた。渡航前と渡航後における自身の変化は、大きく分けて2つある。

一つ目は、海外で生活することに対する抵抗が無くなったことである。オーストラリア滞在中、様々なレストランで注文・会計を行い、店員と会話を楽しむことができた。週末には、自分で計画を立て、日本とはシステムの異なる交通機関を駆使して目的地まで自力でたどり着くことができた。時には突然、電車が線路工事のため運休になり焦ったこともあったが、そんな時も振替バスを見つけ出し、切り抜けることができた。こうした1つ1つの出来事は何気ないように感じられるが、1か月間積み重ねたことで、一人で海外生活を送ることに対する自信に繋がった。

二つ目は、自分から積極的に行動するようになったことである。私は CITY キャンパスでの授業のレベルについていけず、途中で授業のレベルを変更した。しかし、そのことで様々なことを経験することができた。変更する前のクラスは、マレーシア、バリ、タイ、中国など、様々な国籍の生徒で編成されていた。授業が始まると、彼らは先生の問いかけに対して一斉に答え、自分の考えを述べようという強い意志を感じた。当初、私は周囲の自己主張の強さに圧倒されてしまったが、これが世界基準なのだということを実感し、失敗を恐れずに自分の考えを積極的に述べる決心をすることができた。それ以降、CITY キャンパスや Clayton キャンパスの授業で先生の問いかけに対し、積極的に自分の意見を述べる姿勢を貫いたことで、大きな手ごたえを感じることもできた。授業のレベルを変更した後のクラスは、圧倒的に中国人学生が大多数を占めていた。休み時間中、彼らは固まって中国語で話していることが多く、初日はそんな彼らに話しかける勇氣を持てなかった。しかし、翌日、勇氣を出して、近くに座っていた中国人生徒に笑顔で話しかけてみると、予想以上に会話が盛り上がり、仲良くなることができた。こうした経験を通じ、積極的に行動することの重要性を実感することができた。

今回の留学は、自身の視野を広げただけでなく、これからの自分の物事への取り組み方に大きな影響を与えた有意義なものとなった。加えて、ホームステイ家族も明るくフレンドリーで、とても楽しい充実した毎日を過ごすことができた。このような素晴らしいプログラムに参加できたことに感謝したい。

今回このプログラムに参加しようと思ったのは、長期休み期間中のなかで最も滞在期間の長いのがこのプログラムだったからだ。もともと英語は得意な方ではなく、特にリスニングなどはとても苦手である。なので、嫌でも耳に慣れさせようと参加したくてこのプログラムに目をつけた。初めは、普通にリスニングの問題を解くのにあやふやな部分が多いのに現地でホストファミリーや学校の他国からの留学生とトーク出来るか不安であった。その不安は的中し、初めのころは初歩的な会話を聞き取るのも本当に苦労し、つらかったこともあったが、数日も経てばだんだん周りと打ち解けあえ始めて会話をするとときに緊張感をさほど感じなくなっていった。ホームステイ先やクラスの友達と話す時も英語で話せていたことも多いが、まともに文で伝えるというより片言になってしまうことが多かったので、自分の英語力のなさを嫌というほど実感した。しかし、その分帰りの電車やバスで伝えきれなかったことを後でしっかり文に直していき、少しずつストックを増やしていったのは良かったと思う。また会話のストックを増やす手段の1つとして良かったのが、誰かが言っていたフレーズをそのまま丸覚えすることだった。基本的な単語ではあるが、一人で考えていてもなかなか出てこないことも多かったので、個人的になかなか効率のいいやりかたであった。

また、メルボルンに着いて生活していて一番苦労したのが、伝えることより聞くことの方が難しく感じたことだった。なぜなら日本人が話す英語についても言えると思うが、その国特有になまった英語を聞く機会が多かったからだ。普段日本で勉強する時に聞いていた英語とは別の感じで話されている英語を聞き取るのはなかなか苦労したが、ある程度英語に耳が慣れてくると聞くことが少しずつ出来るようになっていき、なかなか良い経験が出来たと思う。

メルボルンの街についてとても興味深いところが多く、ほぼ毎日授業終わりや休日には散策に出回ったほどである。とても多くの店や施設があり、州立図書館や聖堂、また駅の雰囲気はとても歴史を感じさせる作りとなっていた。また休日には少し離れて、水族館や動物園、またグレートオーシャンロードに行ったのもなかなか思い出深いものがあった。

そしてシティ、クレイトンの授業はとても自分の英語力の向上に役立った。シティでは、主に英語のスピーキング、リスニングを学んだが、とてもアットホームな良いクラスで英語を学べたと思う。とても発言しやすい空間で、英語を使うのに段々とためらいがなくなり、自信が付き始めた頃だった。またクレイトンの授業では、主に後半でプレゼンの練習をした。プレゼンの、それも英語での練習で、戸惑いもあったが初心者でもやりやすい内容でとても良い経験が出来た。この経験を生かし、そして継続して練習していくことでさらに磨きをかけていきたいと思った。

実を言うと私は7年前高校生の時学校行事でシドニーとメルボルンに来たので、今回オーストラリアを訪れるのは2回目だった。そのため思い出という感じより懐かしいなあという感じの方が大きかった。そのため半年前にアメリカに行った時に大量にお土産を買ったり写真を撮ったのと比べたら、今回はあまりお土産を買ったり写真を撮ったりしなかった。今回は北半球が真夏の時に季節が半年ずれている南半球に行ったので、体に大きな違和感を感じ寒暖差アレルギーで鼻水が止まらなくなった。1日でボックスティッシュ2箱分ぐらい鼻をかんだ日もあった。鼻をかみすぎてだるくなって大学を休んだことが1日あって残念だった、現地ならではの listening と speaking なのに。reading と writing は日本で机に向かって勉強するときでもできるが、listening と speaking はネイティブの国にいない限り都合よく学べない。今回オーストラリアに来て、最初は発音やアクセントを間違えてネイティブの人達に言葉が通じないことが多かったが、シティキャンパスの授業で発音記号とアクセントの重要性を教わったので、後半はそこそこ大丈夫になった。話すスピードはゆっくりでいいが、発音とアクセントを間違えたらダメだ。クレイトンキャンパスでは、個人もしくはグループでパワーポイントを使ってのプレゼンテーションを行う機会が多数設けられていたので、有意義な授業だった。

ホームステイ先での生活面においては、今回はかなりセルフサービスだった。7年前にホームステイしたときは、家から学校まで車で送ってもらったり、シャワーを浴びるときボディソープとシャンプーを貸してもらっていたが、今回は、時刻表等も自分で調べて電車やバスで通学したり、シャワーを浴びるときに使うボディソープとシャンプーも自分で買ってくるという形だったので少し大変だった。でも大変でよかったと思う。何でもかんでもホストファミリーに頼っていたらいつまでも自分が成長しないからだ。セルフサービスだったおかげでオーストラリアの交通のしくみに慣れたし、ショッピングにも目覚めることができた。僕は電車が好きなので、車内アナウンスを英語で聞いたりして楽しかった。オーストラリアでは、風呂がバスルーム式ではなくシャワーブース式なのと、熱水と冷水にハンドルが隔離されているため、寒かったり温度調整が難しかったりした。オーストラリアではシャワーを浴びたくなくなったので、1週間に2日ぐらいしか浴びないことにした。

今私は2度とオーストラリアには行きたくないと思ったりもしているが、1ヶ月間モナッシュ大学しかも2ヶ所のキャンパスに通えたことは貴重だったと思う。旅行にオーストラリアはお勧めしないが、留学にオーストラリアはお勧めする。

メルボルンは、南極寄りに位置し、南風を浴びると南極からの風を浴びるので、メルボルンの海沿いは春夏秋冬関係なく半袖だと寒いであろう。

数理・計算科学コース修士1年

私が今回のプログラムに参加しようと考えた最大の要因は、留学するならば今回がラストチャンスだと考えたことである。次の長期休みである春休みには就職活動が控えているため、一カ月単位での短期留学をするならば今回が最後という思いであった。

なるべく長い時間海外にいたいと思った私には当初2つの行き先の候補があった。単身アメリカワシントンに行くプログラムと今回私が参加したオーストラリアモナシュのプログラムである。値段等諸条件はあまり変わらず、そこで私の中で決めてとなったのはホームステイだ。それはホームステイの方が他者と英語で話す機会が多いのではないかと思ったことと、少しでも英語の勉強に集中しやすい環境だろうと思ったことが主な理由である。結果から言うと、ホームステイのあるオーストラリアにしたのは大正解だった。家によっては状況が全く異なり、中には早く帰りたいとずっと言っている友達もいたが、私にとっては最高の環境だった。それは同じ家にホームステイで先にきていた中国人のロビンの存在がとても大きい。一カ月先にきていた彼は家のことや学校のことを多々教えてくれた。またお互い必然英語でコミュニケーションをとるしかないので、英語で話す機会を自然と沢山得ることができた。実際ホームステイの大半は私達だけでなく他の留学生も受け入れていた。しかしその中にはあまり積極的でない子も多く、殆ど会話はないという話もしばしば聞いたので、その点私はルームメイトに恵まれたと思う。学校から貰った情報には書いていなかった嬉しいサプライズだった。

さて、今回私は3つの目標を掲げて参加していた。勿論英語力の向上、そして知見を広げる、そして積極性の獲得である。

一つ目は学校の環境がとても良く、多少なりとも達成できたように思う。クラスに恵まれたのもあるが、発言を促す教室、自由に動ける机イス、勉強するための環境がモナシュにはあった。他の語学学校に留学中の日本人に現地で会ったが机イス固定制だそうで、それに比べ自由に動ける分先生がバラバラにグループを組ませ勉強することができ、全員が意欲的に授業に取り組めるようになっていた。この制度はとても有用で、東工大でも教育改革としてむしろこのような部分に着手してほしいと思った。

二つ目ですが、行ってからわかったことであるが、メルボルンはアートの街で、街々の壁に落書きされてアート化されていたり、学生は無料で入れる美術館が多数あったりした。だから、用意していった国際学生証は日の目をみることなく終わってしまった。

最後に積極性について。自分でいうのもなんだが、とても積極的に動いた方だと自負がある。しかしそれでもまだまだという部分も多々あり、まだ課題も残っているといった状態である。

一カ月というのは長いようであつという間だった。ともあれ、メルボルンはとてもいい街なのでこれを読んだ人には是非モナシュのプログラムをおすすめします！**Be active!**

地球惑星科学コース修士1年

まず、私が今回の留学プログラムに参加した理由について述べる。修士課程に進学して以来、高校時代からの友人の多くは就職をし、社会人として生活しているという環境に置かれるようになり、このいわゆるモラトリアムの時期に、様々な経験をしたという気持ちを強く持つようになった。研究室に所属し、学生室に机を持つようになってから、実際に英語を使うことが必要とされる場面に置かれるようになり、私は初めて、自分が全く英語を話すことができないということに気付いた。英語で論文や教科書を読むようになり、英語で学会発表を聞く機会があり、受動的に英語を使う機会はこれまででもたくさんあったが、能動的に英語を使うことは全くできないという事実打ちのめされた。そこで、自身の見聞を広め、また、どんなレベルであろうともとにかく英語を話すことができるようにするという目的を定め、1か月という短期留学プログラムの中では最長のこの留学プログラムに参加した。

この留学プログラムの特徴の一つである **Monash English** の授業は本当に素晴らしかった。15人前後という少人数の授業で、独自のカリキュラムにそって、授業が行われるのであるが、留学プログラムの特性上、週に3日を3週間で合わせて9日間しか参加することができなかったことが残念でならない。1日の授業は4時間である。初めに聞いたとき、大学の90分間の授業と比べかなり長く、そんなに長時間集中できるだろうかと不安だったが、実際に授業を受けてその心配は無用であったとわかった。授業は非常に練りこまれており、4時間という長時間にも関わらず、集中を途切らせることなく参加することができた。最後の授業を受けるころには、苦手だと思っていたリスニングやスピーキングがかなりできるようになり英語力の向上を実感することができた。

このプログラムの中で感じたことで一番大きなものは、英語が非常に重要であると同時に道具であるということを実感したことである。オーストラリアでの生活が始まり、街を歩いて初めて感じたことは、事前に聞かされて想像していたよりも、オーストラリアに多様な人たちがいるということだ。私が所属していた **Monash English** のクラスにもさまざまな国の学生が参加していた。英語が母国語ではない留学生の間で会話をしている、たとえ完璧な英語が使えなかったとしても、気持ちを伝えることができるということがどれだけ素晴らしいことであるかを実感することができた。そして、お互い地元を遠く離れて知り合うことができた彼らと、今後も交流を続けていくために、英語をもっと身に着けて、いつか母国語で語らうように英語で会話できるようになりたいと強く思う。

今回の留学のプログラムに関わったすべての方々に感謝する。様々な国の、様々な人々の生き方に触れることができたこの留学で得た経験は、英語に限らず、必ずこれからの人生を送るうえで大きな力になるだろうと確信している。

物理情報システム専攻修士2年

今回のプログラムに参加した私の一番大きな目的は「海外での生活を経験した上で、海外で働きたいと本当に思えるかどうか」を見極めることでした。さらに、海外で働く機会が与えられた際に躊躇することなく手を挙げる積極性を身に付けることも大きな目的でした。なので、今回は授業中に限らず旅行中もわからないことがあれば積極的に話しかけて解決するようにしました。この心がけによって、外国人とコミュニケーションをとることへの抵抗が無くなったと感じています。また、オーストラリアにはフレンドリーで優しい方が多く、知らない人とでも会話を楽しむことができると思いました。これはオーストラリアの多民族な文化に依るものが大きいとは思いますが、しかし、英語でのコミュニケーションには日本語のような堅苦しい表現が不要であることも大いに影響していると感じました。また、現地の方々がポジティブに生活している様子を見て、自分も海外で働けば楽しく働けるのではないかと想像されました。

また、フィットネスに対する考え方が成熟していることも魅力的でした。街中にサプリ屋さんも多く、モナシュ大学のジムは最新のマシンが揃っており、売店には沢山のプロテインバーが販売されていました。モナシュの学生と筋トレやサプリに関する話題で盛り上がることができ、非常に楽しかったです。

今回のプログラムを通して学んだ一番大きなことは「失敗することの大切さ」です。私の **Monash English** の先生が初回の授業で“**I like mistake!**”とおっしゃっていたのが印象に残っています。先生は、「英語で発言することを恥ずかしがらずに挑戦して失敗しなさい、そして学んで成長しよう」ということを何度もおっしゃっていました。なので、授業中に間違えた発音や単語、文法で発言した場合には、先生は良い教材を提供してくれて有難うといった感じで毎回丁寧に説明してくれました。英語が母国語で無い人が英語を上手く喋れないことは当然のことで恥ずべきことでは無いと思いましたが、寧ろ、全く発言せず消極的になることこそが最も恥ずべきことだと感じました。この授業のおかげで、私のプログラムの目的であった積極性は改善することができたと思います。**Engineering Day** での東工大代表の挨拶を引き受けたことも、その一例になると思います。この挨拶がこのプログラムの中で最も緊張したので、その後の研究内容などのプレゼンは全く緊張することはありませんでした。また最後のプレゼンは原稿を考えずに英語で説明することができたので、自分の頭の中に英語を話す回路が少し構築されたように感じています。最後のプレゼンの日は高熱が出て頭と喉が痛く、非常に辛かったです。海外の病院で診断を受けるという非常に貴重な経験ができたこととポジティブに捉えています。

今回のプログラムを通して、私は異文化を体験し、異文化の人と交流することが楽しいと感じたので、やはり将来は海外で働いてみたいと強く思いました。私はこの一か月は非常に充実していたという意味でとても長く感じましたが、もっとメルボルンに滞在したいと思いましたが、一方で、二度と日本から出たく無いと感じた学生も居ると思いますが、それはそれでそんな自分を発見することができたという意味で有意義な体験になったと思います。やはり、挑戦して学ぶことが大切です。